

マリヴロンと少女

宮沢賢治

青空文庫

城あとのおおばこの実は結び、赤つめ草の花は枯かれて焦茶色こげちやいろになつて、畑の粟あわは刈かりとられ、畑のすみから一寸ちよつと顔を出したのねずみ野鼠はびつくりしたように又また急いで穴の中へひっこむ。

崖がけやほりには、まばゆい銀のすすきの穂ほが、いちめん風に波立っている。

その城あとのまん中の、小さな四しつ角山かくの上に、めくらぶどうのやぶがあつてその実がすっかり熟している。

ひとりの少女が楽譜がくふをもつてためいきしながら藪やぶのそばの草にすわる。

かすかなかすかな日照り雨が降つて、草はきらきら光り、向う

の山は暗くなる。

そのありなしの日照りの雨が霽れたので、草はあらたにきらきら光り、向うの山は明るくなって、少女はまぶしくおもてを伏せる。

そっちの方から、もすが、まるで音譜をばらばらにしてふりまいたように飛んで来て、みんな一度に、銀のすすきの穂にとまる。めくらぶどうの藪からはきれいな雫がぽたぽた落ちる。

かすかなけはいが藪のかげからのぼってくる。今夜市庁のホールでうたうマリヴロン女史がライラックいろのもすそをひいてみんなをのがれて来たのである。

いま、そのうしろ、東の灰色の山脈の上を、つめたい風がふつ

と通つて、大きな虹が、明るい夢の橋のようにやさしく空にあらわれる。

少女は楽譜をもったまま化石のようにすわつてしまふ。マリヴロンはここにも人の居たことをむしろ意外におもいながらわずかにまなこに会釈してしばらく虹のそらを見る。

そうだ。今日こそ、ただの一言でも天の才ありうるわしく尊敬されるこの人とことばをかわしたい、丘の小さなぶどうの木が、よぞらに燃えるほのおより、もつとあかるく、もつとかなしいおもいをば、はるか美しい虹に捧げると、ただこれだけを伝えた、それからならば、それからならば、あの……〔以下数行分空

白〕

「マリヴロン先生。どうか、わたくしの尊敬をお受けくださいませ。わたくしはあすアフリカへ行く牧師の娘でございます。」

少女は、ふだんの透きとおる声もどこかへ行つて、しわがれた声を風に半分とられながら叫ぶ。

マリヴロンは、うつとり西の碧いそらをながめていた大きな碧い瞳を、そっちへ向けてすばやく楽譜に記された少女の名前を見てとった。

「何かご用でいらつしやいますか。あなたはギルダさんでしょう。」

少女のギルダは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえ

かがや
て輝いて、いきがせわしくて思うように物が云えない。

「先生どうか私のころからうやまいを受けとつて下さい。」

マリヴロンはかすかにいきしたので、その胸の黄や堇の宝石
すみれ
は一つずつ声をあげるように輝きました。そして云う。

「うやまいを受けることは、あなたもおなじです。なぜそんなに
いんき
陰気な顔をなさるのですか。」

「私はもう死んでもいいのでございます。」

「どうしてそんなことを、仰おつしやるのです。あなたはまだまだ
お若いではありませんか。」

「いいえ。私の命なんか、なんでもないのでございます。あなた
が、もし、もっと立派におなりになる為ためなら、私なんか、百ぺん

でも死にます。」

「あなたこそそんなにお立派ではありませんか。あなたは、立派なおしごとをあちらへ行つてなさるでしょう。それはわたくしなどよりはるかに高いしごとです。私などはそれはまことにたよりないのです。ほんの十分か十五分か声のひびきのあるうちのいのちです。」

「いいえ、ちがいます。ちがいます。先生はこの世界やみんなをもっときれいに立派になさるお方でございます。」

マリヴロンは思わず微笑わらいました。

「ええ、それをわたくしはのぞみます。けれどもそれはあなたはいいよそうでしょう。正しく清くはたらくひとはひとつの大きな

な芸術を時間のうしろにつくるのです。ごらんなさい。向うの青いそらのなかを一羽の鵲こうがとんで行きます。鳥はうしろにみなそのあとをもつのです。みんなはそれを見ないでしょうが、わたくしはそれを見るのです。おんなじようにわたくしどもはみなそのあとにひとつの世界をつくって来ます。それがあらゆる人々のいちばん高い芸術です。」

「けれども、あなたは、高く光のそらにかかります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌います。わたくしはたれにも知られず巨おおきな森のなかで朽くちてしまうのです。」

「それはあなたも同じです。すべて私に来て、私をかがやかすものは、あなたをもきらめかします。私に与あたえられたすべてのほめ

ことばは、そのままあなたに贈^{おく}られます。」

「私を教えて下さい。私を連れて行つてつかつて下さい。私はどんなことでもいたします。」

「いいえ私はどこへも行きません。いつでもあなたが考えるところに居^おります。すべてまことのひかりのなかに、いつしよにすんでいつしよにすすむ人人は、いつでもいつしよにいるのです。けれども、わたくしは、もう帰らなければなりません。お日様があまり遠くなりました。もすが飛び立ちます。では。ごきげんよう。」

停車場の方で、鋭^{すどふえ}い笛がピーと鳴り、もずはみな、一ぺんに飛び立って、気違^{きちが}いになったばらばらの楽譜のように、やかましく鳴きながら、東の方へ飛んで行く。

「先生。私をつれて行って下さい。どうか私を教えてください。」
うつくしくけだかいマリヴロンはかすかにわらったようにも見えた。また当惑^{とうわく}してかしらをふったようにも見えた。

そしてあたりはくらくらなり空だけ銀の光を増せば、あんまり、もずがやかましいので、しまいのひばりも仕方なく、もいちど空へのぼって行って、少うしばかり調子はずれの歌をうたった。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

マリヴロンと少女

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>